



世說百談

四

隨
7
四

1曾5

349

4止



門 4 曾
號 349
卷 4

福川圖書印

世 事 百 談 卷 之 四 目 録

松竹梅
九尾狐
そり貝
類伽鳥
木中子佛像あらし
清正家守のや後
赤國
潭帖と砲石とす
一残切
津軽笛

梅子嘗
手飼の虎
梅檀三葉より香
芥子粉燈子ついで奥陣
清正頼目の旗
僧日遠の傳
書幅子て穢を拭ふ
小児の詩
拾人形
氣のよめ入

明治三十二年十一月五日
坪内雄蔵
氏寄贈

目録



箱入娘 錢樹子

拍餅

海流

手綱深

四十二物あはれ

空盡残 たのき

通り悪魔の怪異

えん書

懸釣 引墨

竹のうんざり

牡丹餅 萩の巻

寸をきとよめる

文七元結

起請

貸税

能書草とえり

和子印を押

苦学

原稿百條今もやすらうためおぼろの山
舎せあるひも分ちて百三十八條とす

世帯百談卷之四

松竹梅

松竹梅をこが邦子八慶賀のゆれと唐土少く八歳寒三友

このふと月令廣義子つる葛原詩話子世傳の恒言子

して賦咏不顯るを稀なり高士奇が金齋退言草記小

五龍亭舊為右素殿削于明天順年在右液池西南

向後有草亭画松竹梅于上曰歳寒門まゝ元張伯

淳題皇甫松竹梅園詩あり曰三友真の歳晚時政縁

冷澹易相知何須近舎今皇甫却向園中覓補之元

詩二集養蒙先生集子出づとあり松ありと云る元次

山巧論子古人郷無君子則与山水为友里無君子



則以松竹為友坐無君子則以琴酒為友東坡詩子
風泉兩部樂松竹三益友と云々、陸餘叢考歲寒三
友此條子之、唐の李邕が題画此詩子、對雪寒窩酌酒
敲冰暖閣烹茶醉裏吟重展畫吟題松竹梅花とあり

梅子嘗

梅子嘗をよめると如方子六事のとり、鶯宿梅枝故事拾遺
如方集子云々、松竹三益友と云々、松竹ハ
らるあづきりのくもあつり、いよも萬葉集子も嘗子ハ
多く梅をよめると、詩也葛野五北春日散鶯五言
子素梅用素屬嬌鶯美嬌声と云々向あり唐子ハ
とのおり子王維の早春行の詩小紫梅發初遍黃句歌

猶澀とつと鶯梅を對す梅もす、ま竹林子虎の住

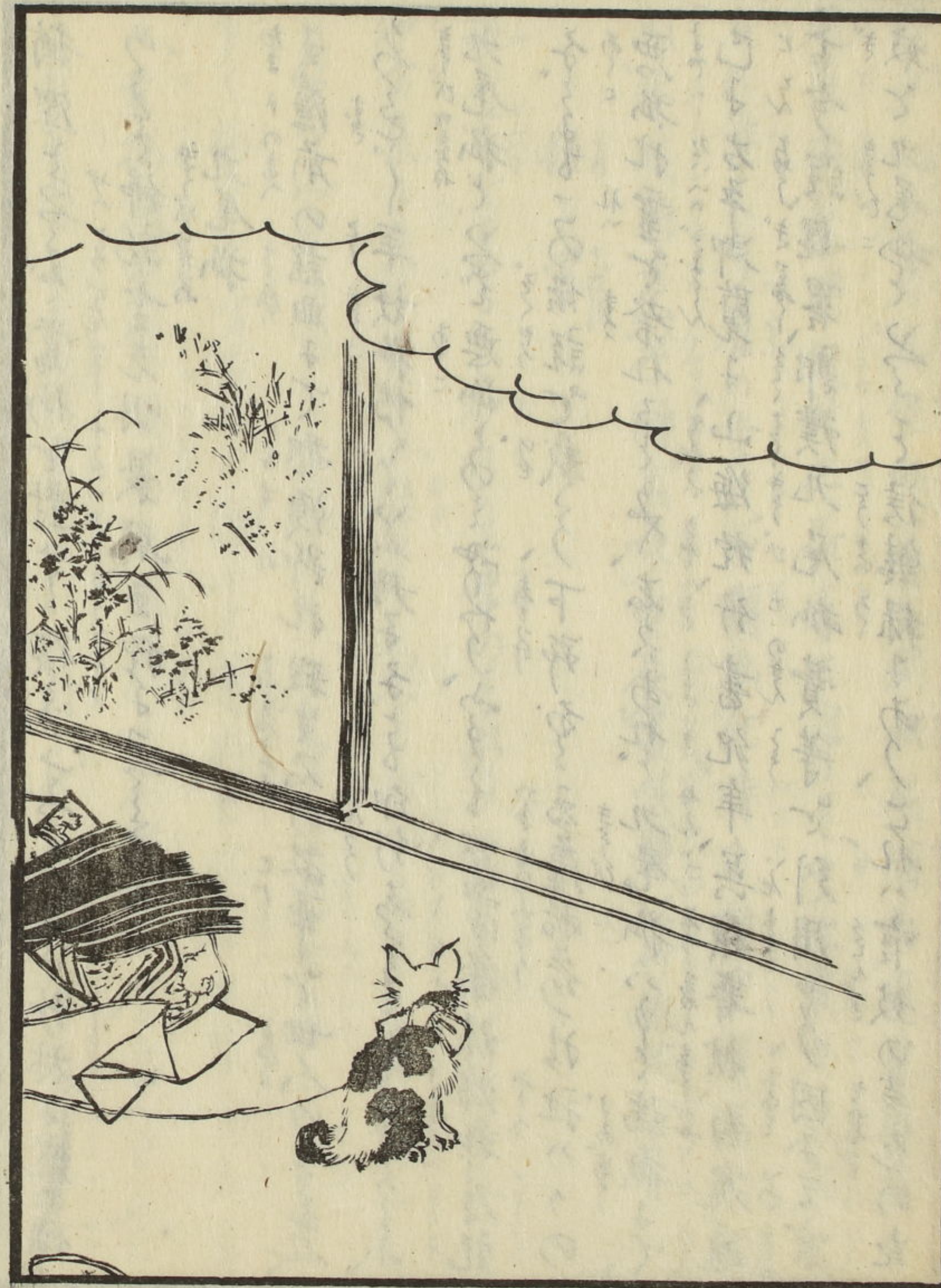
めると佛託金光明最勝王經子云々

九尾狐

五薄前の謡曲子て那須那れ殺生石の故事と世人のま
うらまへ、年妖狐傳といふ冊子とも印行あるとあり、うら
九尾狐といふ悪狐といふや、あまも下学集珠林神及記
子にもこの俗説を載り下野ある五薄狐の社ハ、
悪狐此靈を祭れり、あまも九尾狐ハ、瑞獸子て、
巳子右平御覽子山海經竹書紀年吳越春秋白虎通
古今註魏畧郭璞九尾狐費等と引用せり、因子官
妓と九尾狐といふと、侯鯨録子あり、これハ官妓の声色のた



四
又二



五

め子人の盡懲せらるるを狐子魅さるる子爺へおどろく

手綱の虎 山猫

虎と猫といふ大十剛柔ハチチ子殊ありとぞも、此形状のお類

すもこと絶てあり似たり、されば、邦のあり、猫をて此虎

と云ふこと、古今六帖のあり

あさちふれ小孫の志は系いふれ、て、そのあり、

あゝ源氏物語女三宮のそり子、唐人の必謀、虎を山

猫といふこと、西遊記第三回、韃靼虎、六金、星解厄といふ條

子伯欽道風响、是個山猫、来り、只見一隻、

とあり、形似をりて、互に異名とす、まじり、あゝおどろく、

とり貝

鳥貝ハ赤貝子似て、殻薄く、貝の表、うろこあり、丹浮の雲津、

紫碗貝と云ふ、肉を食う子似く、色黄なり、正二月、此肉を酢

子浸して、京師へ持り、賣れり、此貝、鳴子化す、ゆゑ、名貝と

云ふ、と介品子、江戸にて、つね子、夢、魚子、も、子、製、

鬻く、されど、味、その、美、上、徳の、國人、此、海、上、子、

名、と、いふ、多、く、あり、その、名、此、水、子、り、化、し、く、貝、を、あ、れ、

名、貝、と、いふ、多、く、あり、その、肉、此、卵、の、如、く、あり、此、の、故、あり、と、り、

勢、の、あり、より、廻、船、の、舟、人、船、が、り、の、そ、り、と、り、貝、を、求、め、て、食、料、と

す、その、價、の、と、外、に、や、す、き、あ、り、あ、る、名、を、て、此、貝、を、と、り、肉、を、見

る、子、名、の、形、あり、と、り、り、され、ハ、多、貝、と、いふ、つ、れ、の、目、け、子、て、名、を、

と、せ、り、子、り、ま、お、り、ひ、え、ん、と、名、れ、る、月、令、子、雀、の、化、し、て、蛇、と

あつとあをせりハ鳥此見子化すと云ふがさあぶくや、

梅檀ハ二葉より香カミ 頻伽鳥ヒンガトリ

梅檀ハ二葉より香といふハ佛説子出て去邪子をも少くハ以り

了了誘あり、觀佛三昧海經子、牛頭梅檀生伊蘭叢中未

及長、大在地下時、芽莖枝葉如扇、浮投竹筍、仲林

満月卒後地出成梅檀樹、衆皆用牛頭梅檀上妙之

香永無伊蘭臭、惡之氣と云々、撰集抄子、せんえハ二

葉よりめんえりく、梅花ハつらあり子香あり、ま、宝物集子、

ハ伊蘭といふ樹あり、その香臭くして一枝二葉を嗅く子

醉卧して死門子、其伊蘭四十里此間子生茂らん中子梅

檀といふ樹、此中子生出て未と二葉子及を、一して葦の角を

くりおんが香芳くして伊蘭此臭氣を消し失ふ、ま、漁

平盛衰記子梅檀ハ二葉より芳くして四十里の伊蘭林ヤ

翻し頻伽鳥ハ卵の中子くあれこそ其声、諸鳥小勝、くると

又々、因子云、頻伽鳥、ま、訥陵、頻伽鳥、つ、翻、詩、名

義集を、訥陵、頻伽を、妙音と、譯、したる、義、譯、して、ま、訥

陵を、美妙、頻伽を、音声と、譯、す、あり、も、あれ、と、ま、子、誤、り、子

て、正、し、る、は、サ、リ、ハ、唐、書、子、訥、陵、國、ハ、頻、伽、鳥、を、貢、す、よ

し、あれ、ハ、訥、陵、ハ、國、の、名、あり、と、明、く、あり、頻、伽、ハ、鳥、と、ふ、こと、の

梵、語、あり、その、證、ハ、十、誦、律、子、頻、迦、軍、持、と、あり、と、南、海、寄、歸

傳、子、鳥、頭、瓶、と、譯、して、う、を、ま、て、ま、サ、リ、ハ、一、う、色、ハ、訥、陵、頻

伽、訥、陵、國、子、産、す、鳥、とい、ふ、と、あ、を、を、その、声、れ、と、云、け

まは音声のやうに詩しきと又々々、

菁を行燈ふつて喪除とす

物類相感志子、三月三日收菜花置燈祭上則飛蛾

政喪不投といふとあるハ、多邦のありしハ、四月八日菁を

そつて行燈子つりて並て喪あけとす子似と、

木中子佛像ありと

文政己丑の夏、菅原あつ多宝院といふ高言宗の寺子て、椽の

木をきりしと此ありしハ、その木れきり口子佛像の焼がき

るごとく現るれありしハ、人々奇異のせひとれし日を燈とす

ありしそのと世にあおぬくきとえんハ、その佛像子まうつるのい

と多うたり、そりき紀事および佛像の写真ハ、予が随掃篇に載

たれハ、そのとあると、曠園雜志子有柏樹六十枚、圍以其

堅重難斧鋸而折之、中有觀音大士像、極其端好、崖

石水、竹童子、鸚鵡之影、纖細備具、像若圖畫、此面呀

有合之、彼面無亦少、別と又々々、木中子文字ありと、ハ

漢子それたや、ありと免つし、ハ、佛像画圖の現とハ、

稀なるを、こゝに、木中子文字ありと、ハ、述異記、西陽雜俎、漢書、

好、木中子文字ありと、ハ、述異記、西陽雜俎、漢書、

春渚紀、圃地、ハ、吾邦の國史、今、抄、砂、石、集、佛、書、子、ハ、宝、積

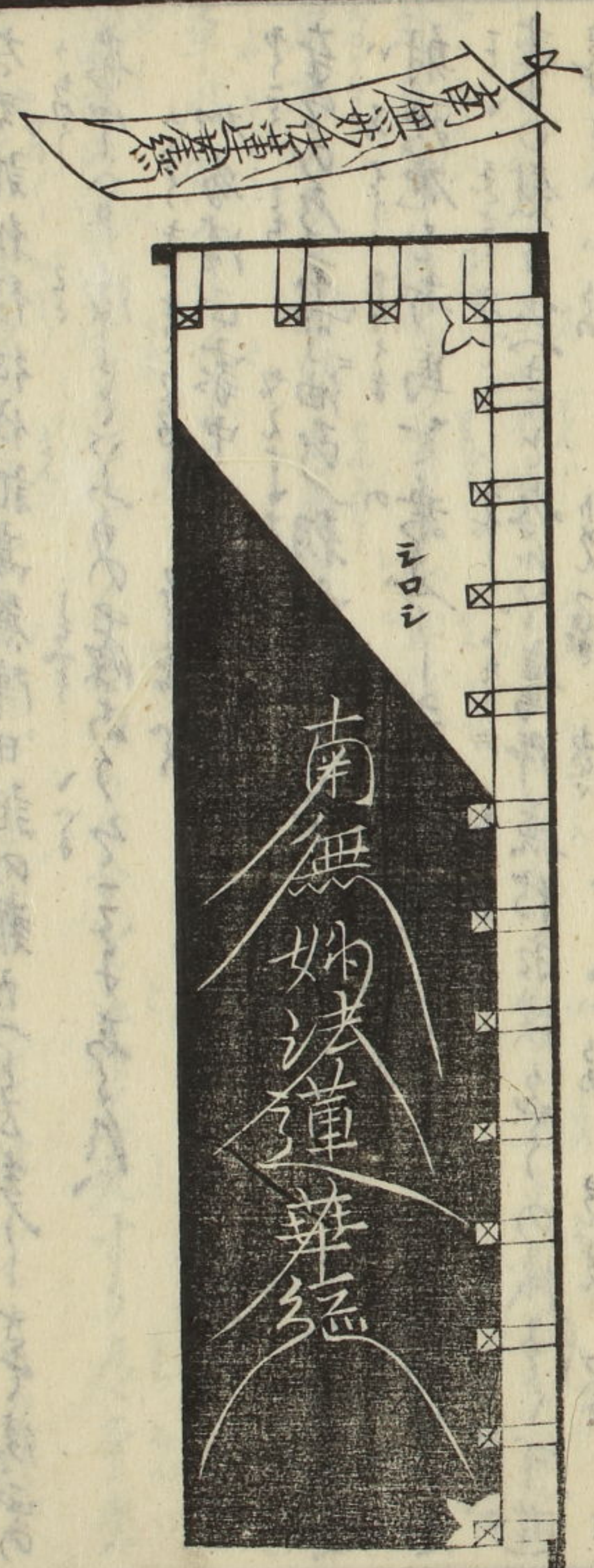
經、子、も、又、元、折、た、く、柴、此、記、俗、説、辨、論、あり、て、人、も、あ、り、と

と、お、れ、ハ、こゝ、に、あ、り、と、

清心題目此旗

加茂清正の朝祥國へ後海のとき題目の旗をたてて征伐せしむ
 といふに兒童重走平も話柄とすまことあり、それ事實の正しくめの
 子見くくくハ清正記子加茂子ハ南無妙法蓮華經の御旗を
 たまふあの御旗ハ秀吉公播磨國拜領のとき信長公より教
 したまふ吉例子まうせてくぐりたまるとあり、これ子ありく
 おりハ、もとあり加茂清正ハ日蓮宗子てく信仰もあろうなれ
 ば、とさく子題目の旗を賜さく、とて見くく、されハその宗つ子
 て清正公大神儀を仰ぎまらねるも念故子まき子あらず、それ
 旗の縮國諸將旗國とくくめの子載せく、それのくあらず
 南不川から妙國寺子も加茂清正ハ自宗子てくく題目の指
 物ありとまら、

加茂肥後守
 かつらひごのり



加茂清正ハ世子まきこるる文武善備此名好子てその傳紀ハ未村
 又善の考子、たれ清正記といふものありいと甲一き記録あり、印

本子ハ續撰法正記と云々のあり、廿子ハ大く續撰の之新に書
本少く傳つる法正記をある人少く、この外法正の事此見らるハ
右周記朝鮮征伐記高麗陣日記の類ゆつと多し、さて法正の
事年ハ中後といふ所の事あり、

加藤清正家中へ中後七條

存々の乃不可油所朝寅別子起し、兵隊をつひの食を喰ふを
射砲を馬と乗る、武士の嗜之能者ハ別て加増を
事○慰子出きと存ら鷹野庶務お撲るの儀あり可遊
山事○衣敷の下右綿袖此同たる、右衣子金銀を費し手
更わき、若
あ不成与中めハ可作曲事ハ石身身お忘し、武具を嗜人を可
扶持軍用の射ハ金銀を費し、平生傍軍づきあひ客一人亭

玉の外吐中まぐく、食ハ黒飯たる、但武藝執事の射ハ多人
救有る事○軍礼法儀の存知事あり、不入事ハ美原を好む
者ハ曲事○舞方一園信心たり、右刀を取らハ人を切らん
と擧ふある上ハ石事ハ一心の事あり、生る物子てける武藝の
外礼舞、務右の軍ヲ知切後事、学又の事て入格を書を讀
忠孝の事、若くも用たる、詩聯句多し、侍止る心、花
車風流ある事、よき事とを存心ハ、女の子成り、れん、
武士の家子生まてあり、ハ右刀をさる、死す、及奉意
あり、常々武乃の味ををさる、ハいさきよき死ハ仕あき、め、
て、心武よき、肝要の事、
右之傳々晝夜可相守、若右之ヶ条難勤を存、軍於有之者、

服を不申速ニ遂吟味男道不成者之印を付可追放棄不可
有疑仍如件 加藤王計頭清正在判 仍申

傳日違傳

肥後の本妙寺第三日違上人と云ふ中朝拜國の人なり夫祿
二年豊右周朝拜征伐此時加藤總大將と云ふ彼地を攻む
ひけ凱旋の時天子あうく獲渡洞此普賢庵子てひとり的小
児の居るを以て名を同をせたまふ何ともそのいふハセ
やぐそ等と云うて獨上寒山石徑斜白雲生處有人家
と云ふその時児の年十歳あり清正これを見り喜見
ありと喜びに邦へつれ之れ生長の後天資伶俐あり
書をもえり子なき仙門子あり名を日違と云ふこれ即本妙寺

の三代あり清正此没後も獅子香花の手向也と云ふ
とりり本化別頭佛祖傳子と云ふこれ清正の蓮宗を信
ずると此ありきと云ふ中と云ふ先年清正幸龍寺より京
所妙満寺の風性ありと云ふその靈室と云ふ中子あり日
違が真蹟此題目あり子體尋常あり友人南珍暮刻
して同好子賜れり

赤國

豊右周朝拜征伐の時彼地はと云ふ赤國と云ふ
とあり、豊右周軍令子赤國のと云ふ一たん子成敗
中つらと云ふと云ふ中周記朝拜征伐記をよむ此朝
記と云ふ、案ずり子舊聞記子今る赤國征伐の事ハ右周の

命者其あはれ諸軍の私を子起るとぞ陳ぐら、此赤國と
少の晋抄の正なり朝祥の修國とありてありて
晋抄をハ赤色子彩り以てハ赤國とありてあり、
赤國の正けありりりり、

書幅を穢を拭ふ

潭帖を砲石と云

甲乙刺言子劉玄子後朝祥還言彼中書集多中國
所無者且刻本精良無一字不倣趙文敏惜為後奴
殘毀至周濶之間然以書幅拭穢の典籍一大厄
會也とあり、まゝ三韓紀畧、西韓之士編著素稱今
播上國者皆壬辰所傳をともむハの國に書籍是也

多小多く一の付子分捕一其れるも、
祿集子淳化周帖既領行潭州即撰刻二本謂之潭
帖余嘗見其初本當与舊條帖雅緻至慶歴八年石
已殘缺永州僧希白重模東坡猶嘉其有晋人風度
建炎虜騎至長沙守城者以為砲石無一存者紹興
初茅三次重模失真遠矣と云、吾邦にも弘法大師の益
田池の碑を毀て城壘の石垣と為る類あり唐土の志あり
變じて古書のあらざるもの類あり吾邦も安んぬ
唐仁の亂こそまゝ存き典籍の一大厄なれ、

小児の詩

童蒙先習子やさききとものこと、
條子初朝文祿の頃あり



穢切の義詳ありきり、護史餘論は皇を周のそとを條
 子ニツ子ハ此人軍法子ありき一穢切とのそとを始めらふた人
 ハ一穢を盗えらふも死刑あり、刑罪既子多くあり、六重
 罪の軍をハ或ハ切腹或ハ斬罪獄門子うけ、ちうつけたあり
 ちうつけ刑出来たりと、これにて一穢切の義を明ありとのふ
 了、

拷人形

ある人の説子延室天女の頃れりの子やと考り浮世を
 一ふ、その考ひき遊女れどき女乃小き拷子衣をうちけ編
 笠をきせたり、考り少は内宴をどの席子てのたをむらふと遊
 女のりてあそびとのこ考ひり、

宝曆七年の印本子繪本を撰とる冊子子ころ載國の
 是ハ、そのころも猶この歳にありしころと云ふ、これよりして
 一ハ遊女のこれと云ふありて、あざむく花見舞がけふとのをうら
 興いりてあそびいりて、



あり日柳亭翁子、二の形人形の四多うと云ふ翁子、翁子と云ふ一老
 人の話子むり、人形指といひ、これあり、形遊を、子持約とき

少くさやうのりれ子包免ハ、その形本何子似てをめて名を
 負せり、さてその指子お見れ袖まて、羽織を、おきせ、人
 形廻りの戯れをおあつ、つひにひられ遊戯とありて、なまむ
 内をいりて事をハ用とせん、お何あつ、またあり、おきやう子能く花
 見舞の内を、よて具を興い、あつ、人形指の詞を、つと
 指人形といひ、つと、西武撰の砂金塔、
 影うらせ人形指のふと餅、
 康重

人形指の名ハ、ゆり、こふ、えり、まて、山岡元隣、宝蔵、
 幸翁と名の花見此事を、つと、條子、こら、行き、ふ、む、び、人の人形指
 子つめ、懐舟書子と云ふ、花ハ、つれ、此、情子、え、つ、つ、あ、ふ、と
 も、そ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、顔、つ、き、も、実、子、春、を、春、ふ、れ、や、と、あ、り、



四
又三



四
十一

延享九年の印本言の紀の俳諧東日記子

端午の形祝候て拍木の森冬枯る也

井掛此山や梢の口方此うーをもち

こねの此向子よりて抄りふ子、これ氏よりあまねく節拍とあり

らんもあまねくば、さて予るる文化のころ西遊せしをうら

豊前の中津子て端午の日子あひうらう、菘葉の葉子餅で

つとまゝ家とふもこうら、餅あまねく人も賣れをえうら名を何

とのあより同ざうら、葉すま子地務鈔小菘葉ハ荆のうらあり

葉ぬく挿れ葉のちいさき如く子て葉中子三の筋あり冬

葉落て春出る杖あり実あり、俗子サンキライとも又ハナルトリ

ハラともハ非あり、さうらうらうら葉の形槐の葉此とく花色

本うらん花の半弁一尺をうらうて計たまくありて各別のお子

里又の名をうらめつむらうともいふれうをうら武州秩父の山中

一まうらうら子農家客あり、夏子小麦の粉を水子練ぬらち

きうて此むらうの葉を両めんよりあて拍餅のてくしてをうら

く子焼てゆらと子響音應し、葉をさねハ餅子三條の紋見

えうらあひうらうら子授者あり、さうらうら子さふいり子いさぎお

らんとおれえうらま子家の女あり、子是ハこのあれ名お子や

此葉を用うら子細ありや子、扇の竹ふさう言子あり、ひ

て何葉事のいりん号を龜甲餅といふ此葉をうらうらと云

葉の形龜の甲子似り、あまねく葉を延る大葉の葉子も、うら

とを合して葉とこの傳ふとさふされば、さうらうらあの人此

一種あり六排園立路隨筆子大坂の騎子て縁泰寺と云
寺の門前小牌をたてて子石と記あり移て又色ハ彼
生海嵐れ二子似たる形の大石あり秀目茶と付て小藏
子卓子のやうありこれ藏の御子此石持あけり人の名友故
の如くひともあつて何れ力量を試るごとく同ハ左子あつた
此石を指ゆり人の意の付ありと云ふ子そこそをりて世子ハ大
坂の虎石と云ふやめりとありこれハ今彼子て大坂の遊女虎
石と云ひて旅人子守りハひつと形なり
寸をきと誇る
馬の丈四尺を定尺と云ふれありあまたハ一寸より三寸まで
をスといひ四寸より七寸までをハ寸といふを尺キといふ又ハ寸よ

り九寸までを又スといふ今馬乗人ハ寸でそのハ寸の尺
より寸をきと誇る調子ハハ幾寸子てもあつてキとのこと
アツ、雜和集子、
あつたりの寸をきまれ月のあつたハ寸の駒といふであつた
私云馬ハ四尺を馬と云ふをこれ一寸まで寸をハ一寸と
ハ寸まで寸をきと云ふやきといふありと云ふ幸若の舞此言録志
田の詞子名馬の王と云ひてさんへたのありあげ七きハ
かんあけらさハ寸ひきよせやうとのつらうと云ふハ寸七き
ハ寸ハ七寸ハ寸あり幾寸もキといふその證とすハ寸ハ寸
寸をキと云ふことハ古事記傳子寸を伎と云ふハ寸の意なり
万葉集子玉刻春と伎子刻の字を書けるもその意子て伎と

まはるる際を中て小六藩といひありしう、石巻を布松といふも
佐の川市松が好く用ひし故あり、控ま色子路考茶大和柿の
類もこ子能優よりあう、すく物の名北佐梅ハ特託くあう
ぬこ子あり終くすく少くは妻ハ女子子うきとあうを男め
けありいといれあき病と押あ子唐土子男妻といふ熟字あり遊山
の字ハ蒙未子いご山子遊と勿論あるを舟遊山といふ二れ
も唐土子遊山舩といふ文字あり

文七元結

元結のひ子文七元結として上品の稱といひ、修説子これハ切元結の正
子てやうくハ輪元結のく長きま縮むくを浪華の俠士雁金
文七といふ所の書子さう場子といふく一厨許あはは生きて再び

くさうる此勇を示さん、元結を切切その死を決するをあう
をさうハ切元結の短きまを文七元結と人子つとくや、二説
ひるとれ、案ずる子此系ハ水坂のり子て文七鬘結といふ
名おの元結をうらう、文中とくわのうらう、つらうとた
つね々ハある老人のお話子文七といふ元結子うらう、松原紙
の系の名れうと布されく元結車子てあうと足る、うく彼
俠士の時代よりさうき名目あり二の説を向とす、

四十二の抱争

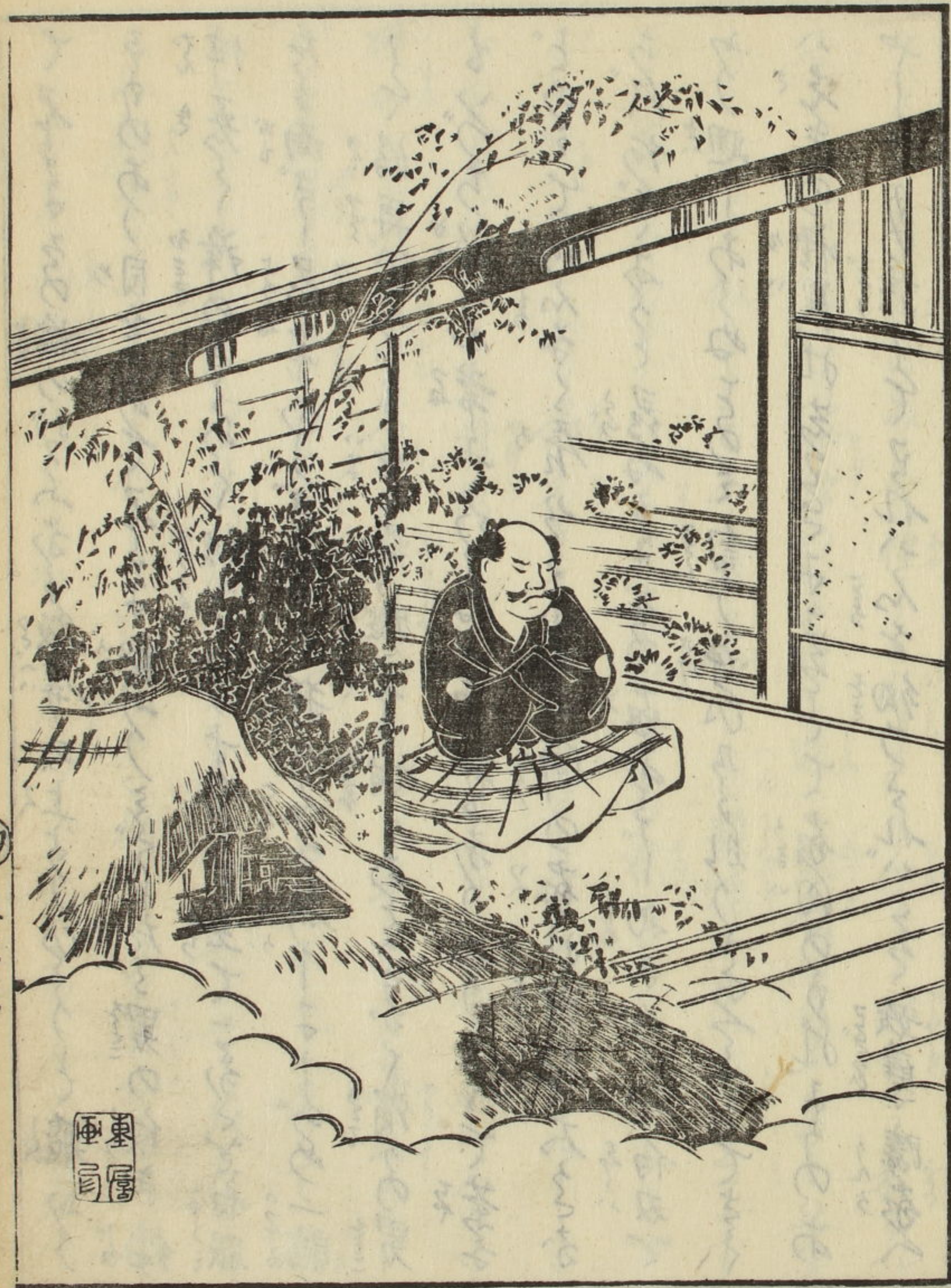
四十二の抱争といふ、ありのうらう、此冊子あり、そハ修をそのあう
と類して、あをまあるあり、遠碧軒隨筆子四十二年の禁裏の
てく書お子足る、雙六の采此目西箇子て四十二あり、され

税といひて毎年子不動おくらり、さて貸たる利を弄る系
へよる故の名ぬり、右の右税と田力といふ、春百姓の切り
田を耕す力とす、ありと、祝詞考子そり、

通り悪魔比怪異

世子狂気するとのせんと、子大う、ハ益此と子んそ苦
め一日も安きあひおきて、さう、子ハ胸子せまり、んをれて狂
ひさハるるあり、されハ男さる、あの子ハ老ハおき、さう、のて、ま、婦
人子ハおる、あるを、れり、あれど、を、男女子、うき、す、何事、も
おき、ふ、や、狂気、し、く、人、を、も、殺、し、られ、も、自害、を、する、こ
と、あり、を、ハ、つ、ぬ、く、の、さ、り、を、さ、あ、ま、う、う、う、さ、る、人、の、我、と
破れ、を、と、も、ふ、さ、る、ゆ、の、あり、くれ、ハ、養生、ハ、業、治、子、も、う、す

平生のんぐけあ、う、う、う、と、養、ふ、と、も、か、う、う、う、の、や、
狂気、す、う、ハ、何、と、お、き、ふ、性、き、と、の、目、子、ハ、さ、る、と、あり、く
る、れ、子、地、う、き、魂、を、う、れ、サ、を、ん、の、さ、る、あり、怪、子、通
り、悪魔、子、あ、ら、う、ふ、こ、ま、さ、り、遊、鬼、変、と、る、の、古、語、お、か
し、く、不、正、の、邪、氣、子、犯、さ、る、う、う、あり、こ、ハ、常、子、ん、ぬ、あ、ま、き
と、あり、び、り、川、井、某、と、う、武、家、あ、ら、射、番、番、う、う、う、こ、ら、
居、る、子、ま、う、上、下、衣、服、を、着、入、て、せ、ま、つ、き、座、を、お、か、め、あ、ま
ま、う、子、撮、さ、き、あ、る、子、あ、痺、の、り、と、ま、あ、る、垂、業、の、生、ま、ら、り
う、中、より、端、茶、と、く、め、わ、る、三、尺、む、う、その、相、う、さ、う、ん、子、ま、の
あ、ら、と、う、う、う、く、お、ひ、ん、つ、き、て、お、兼、業、を、よ、ひ、刀、脇、指、を、次、へ、
の、け、さ、せん、地、あ、ま、き、と、う、お、兼、と、り、あ、や、て、お、卧、氣、を、務、め



て又もその箱のむふあは板屏の上よりひりりと飛おり
 るものあり目をめて又も子髪うりまじりたる男の白き細
 伴もく痒のきまめく瘡おひすくくと立てこゝろを白眼
 たる面ぎも尋常あつさるやゑ持もんを臍下子しづめ一睡
 して好再び又も子髪まで燃えたる箱もあつさく消うの男
 もつづち初らん常ふくぬ庭のやもありりりて茶子
 どのにて何んぞく唇くくふその隣の家は種動大さか
 らげ何ごとあつと尋ねるもその家あつと抱子くひ白刃で
 やり廻りあつぬとのこ白り叫びるる所うとのさるまできく
 ハ老きの怪異れあつと子こゝろとして家ののれよりのお
 やしきめの話してはれはんを細められこそは妖孽隣家へ

うりてその家のあつと怪しく驚きしんより邪氣子犯され
 うるく又もそれこれ世々のいをゆる通り悪魔とのふあのとそ
 まゝこれ子似るとあり四谷の巻類焼ありし時を子す
 める葉が妻あつとあつて時ハあつ秋のあつさもあつ
 ありればあつと掃先き子たむこのこつと文られのりき
 をさるあつとあつと子焼好といひまづるのり恒居あれば大さ
 礎のこゝろ子て子生あつと秋風のさつくと地くしく吹きり
 がるれ草あつとあつと中を白髪の人腰あつと人子あつて杖
 子すりあつとあつと笑ひあつとあつと子あつとあつとあつと
 らぬ顔色子てそのあつとあつとあつとあつとあつとあつとあ
 るもの子て両眼を用ちこゝろあつとあつとあつとあつとあつと

品を唱へつゝんを志づめ志ざりありく月とひききんる子風
子字葉のまひくのかいささく月ふさぎらゆのささる子か
里くふこ三也新も石くつゝる医師の妻俄子狂氣くつゝとい
つこれもお子類ひの性異あぶくむりより妖人よ
里おこるといふを志ふあぶくばや鴛巢三陸陽五りの気の
四附子流終する天地の西理子て不正あふれどもその気両
同子游散終授してつとさく風寒暑濕をさす子八自
不正の気もあつて人子感する子て志づくされが天
地の同子正氣をりく感すれハ正氣応ト邪氣をりて
感すれハ邪氣応トさう色子おもひて身命を失ふも
お子いともうとあぶく

能書不擇筆

能書不擇筆、
のりトよすま筆を
ひつぎ、
の筆記子あり、一の頂唐書をよめり、
亦以書自名、嘗同虞世南曰吾書孰与、
詢不擇紙、筆皆得如、
行儉常曰、
而妍捷者余与、
すとのふも、
金履齒、
鴉頭襪、
可謂能書不擇筆矣、
聊記以餉一笑、

古今人云工その事とあるせんといひ必まづ其器を利くす
と云ふ己子晋の王義之與謝安石尺牘子復与君此章草
所得極不為少而筆至惡殊不稱責其右軍乃能
書そのを不既己子あり紙卷と持まらんて佳と要する
ハ通論子あり

尺字書

世人の拙きを蚯蚓のやうにせらるる業花物語子姫とや
こす書子せせせせこれいづあての所ありと云ふんといふ
まをす子つけても不きき子やつけまるとあをけしんせら
るとつう云子ハ信明集云返車子こす書とてわづこれハ
こひき子子まるとるんをそのとてと云ふんをあり

と云ふるハ文字力なく蚯蚓の蚊とていふてこす
邦のこかきやく唐子も云々續書譜子草體そと
子修子唐宗云行若紫春蚓字如縮林蛇惡無
骨也と云陸放翁の喜小兒輩到初在詩子阿綱字
書蚓滿幅阿給字諸寫特未をとも云々

和字子印を押し

兼好法師が自序の云社の和歌といふれわりその
あふんをまのる男山菜ゆくとこのあらんうきんハ
五十珍川ぶがれのみも絶やんたまも水子老る月
むりより踏たれそありこ山杉袖もろふ神風
こみ方のとてと云ふ兼好といふ篆書の印ありそのふらふ心

しきりのしあはるるがごとく、さきくおあし印おたをハあまのく必
のあまのし小照高院道見親王の竹の画子あまをうせひ
てあまの字くし印あまのたをえしとあまのハ画貫子
色ハ例子のあまのし後鳥光廣卿のあま 光廣卿印
三角あま朱印を押たが浪華の雜候場あま
る魚屋某の蔵子あまのし蜀山翁あまのあり



懸鉤 引墨

おあまの懸るる子可否を對あまの子加懸としてそのまうしきりの人
懸をかつるとあり、まう廻文散状子と領諾しとこの書面
をえすそのあま加懸として句を懸るとあり、これをもまう懸
すしといハ古実子遠つとてあまのし古書を考あまの懸鉤と

いひ引墨をいひ、さて懸鉤といハその懸れと翠簾の
鉤れどく子懸するをいひ、山摠記執事云勤文並申文
懸鉤挿し、又説し、可用何挿乎之由申相府之
處已而説也但以之句知之、可撰翠簾鉤、故可用端
挿之由有るを、まう達幸故実抄神考子懸鉤挿筆承
万元正廿一日切過定、懸鉤於表紙上文、勤解由
大勤文了、資仲抄懸鉤如此也、然而鉤體以無刻目
為善、まうあり、これをも懸鉤のやをまう、まう引墨
のハ玉膳厨子封字を書き、まうあまのまをう、まう北山抄子封
字のうりふを代ハ引墨といハまうあり、まう寛政波集子
書を引くといハまうあり

右阿法師

引夢の附會をいふも又子すまふ引夢も引夢の中は信子引夢の事也但非秘藏事不書封一引夢也と云ふ引夢といふハメまゝハク子との體此と云ふ今公家子と云ふ白紙子これと色とていふと云ふと云ふ者ハニやうの引夢ある或人云唐書の中子斜封と云ふあり引夢のともをいふと云ふ

苦学

古人苦学此をいふやうに其の固き抄子睡りてさあけり戸を閉る人子あはざるの類ハあるハ勤仕れ志高く活計のいそがしき子いそがしてハ叔をりく日子絶ぶる邦のいそがしき子大志者此書生子学文科をたすふられを燈油料と云ふ是書式子也

えり、まゝ、より、火、れ、の、き、と、も、い、あ、と、續、世、絶、お、話、子、あ、り、あ、べ、て、畫、の、ち、と、り、板、ハ、お、か、し、づ、ら、子、こ、ろ、お、ち、あ、り、く、書、よ、む、い、は、と、子、た、り、あ、れ、ハ、某、人、の、悪、好、法、師、を、す、う、ひ、く、り、り、火、の、と、と、子、い、ふ、世、れ、人、を、友、と、し、を、い、ひ、く、り、晁、無、咎、り、書、燈、銘、小、

武子聚螢孫生映雪
雪固易消螢亦易滅
惟此銀缸不疚其光
黃簾綠幕永夕煌煌
經史在右子集在左
如或不勤負此燈火

揚升菴外集子又云、あるれどもと不貧困子せまりてハあるハ一夜学子燈火のそふ人あき子及びハ螢をあるハ雪子映する小至るるをそれたがむ教傳をこら子あるハ後進のめれらる

らば貧窶をりて学を廢すとあるれ

壁を穿て書を讀

西京雜記云匡衡字稚圭勤學而無燭隣舍有燭而不逮衡乃穿壁引其光以書映光而讀之

雪子映く書を讀

孫氏世録云康家貧無油常映雪讀書

螢をあつめて書を照す

晉書云車胤恭勤不倦博學多聞家貧不常得油夏月則練囊盛數十螢火以照書以夜繼日焉

糖を燃して書をよむ

南齊書云顧歡八歲誦孝經詩論及長萬志好學母

年老躬耕誦書夜則燃糠自照

月の光を以て書を讀

南齊書云江泌少貧晝日斫薪夜讀書隨月光

宋史云陸佃字農師越州山陰人居貧苦學夜無燈

映月光讀書躡屨後師不遠千里過金陵受經於王

安石

薪を燃して書をよむ

唐書云畢誠登孤夜然薪讀書母郵其疲奪火使寐

不肯息遂通後史二釋章

木葉を燃して書を讀

唐書云柳璩字昭之公綽族孫也為人鄙野其家不

いかに...
 如何...
 御用...
 東叡山...
 御書物所...
 江戸下谷御成道...
 青雲堂英文藏製...
 英大助

東叡山
 御書物所
 江戸下谷御成道
 青雲堂英文藏製

系於三條	出雲守文次舟	上徳橋浦	陰田	英大助
天保八松橋	河内屋茂多末	下徳多古	七屋久次舟	大坂屋茂多末
伊勢松坂	乃具屋重多末	幸陸古う	橋本	七
不波徳一	天満屋茂多末	上別古書	深本屋重多末	同格古
六兵衛	中津屋只助	同下仁田	橋本屋重多末	同格古
右子小倉	山城屋源十舟	同杉本仲町	堀越屋三舟	同
長門	玉屋要多末	房別助古	伊勢屋徳古書	同水東
徳島	角屋若菜	伊勢屋徳古書	伊勢屋徳古書	同水東
同	同	同	同	同
遠別中倉	同	同	同	同

天保十四年癸卯十二月

山寄久作著

大坂心齋橋通北久太郎町

發行
 同 博勞町 河内屋喜兵衛
 同 安堂寺町 河内屋茂兵衛
 同 順慶町 秋田屋太右衛門
 同心高橋南二丁目 柏原屋清右衛門
 江崎國米沢町二丁目 敦賀屋九兵衛
 同 下谷御成道 釜屋又兵衛
 英屋文藏 板元

書林

